

パリ通信・第147号

国際女性デー



パンテオン近くに住んでいるのでよくその前を通る。パンテオンはルイ15世(1710-1774)がパリの守護神「聖ジュヌヴィエーヴ」を祀るために建てた教会で、1764年建立の礎石が置かれた。ジャック＝ジェルマン・スフロ(1713-1780)が建築家に任命され、1790年に工事は完了したが翌1791年フランス革命時に教会からパンテオン(廟)と呼び名が変わる。1885年国民的な大作家ヴィクトール・ユーゴー(1802-1885)がパンテオンに永眠することになったことからパンテオンは「フランスに尽くした偉大な人」の墓所となった。

現在、ユーゴーを始め82名(男性75名、女性7名)がパンテオンに眠っている。この2月にはミサック・マヌキアン(1909-1944)と配偶者メリネ・マヌキアン(1913-1989)の二人が80年経って一緒にパンテオンに入った。1915-16年アルメニア人虐殺によってフランスに逃れた二人は共にコミュニスト活動家となり、ミサックはレジスタンス活動で1944年パリ近郊のモン・ヴァレリアンで銃殺された。戦後80年経って外国人マヌキアン夫妻がフランスに尽くした偉人と認められたことは大きな意味がある。

女性7名にはメリネの他、科学者マリー・キュリー、同じくレジスタンス活動に貢献した歌手ジョゼフィン・ベッカー、政治家シモーヌ・ヴェーユがいる。シモーヌ・ヴェーユがパンテオンに入ったのは2018年で今世紀に入って女性の人権のために闘ってきた女性たちがクローズアップされるようになった。

3月8日は「国際女性デー」。1908年ニューヨークで起こった女性労働者のストライキに起源するが、暴力や差別を受けずに生きる権利、教育を受ける権利、投票の権利、所有者になる権利、男女平等の給与など基本的な女性の権利と自由を再確認し訴える日である。アメリカやヨーロッパで妊娠中絶を禁止する国が増えつつある今日、世界に先駆けて2024年3月「国際女性デー」にフランスで女性に妊娠中絶の自由を法律化したことは意義深く、フランスのフェミニズムの背景に支えられていると言えるだろう。

1971年4月5日「ル・ヌーベル・オブセルバトゥール紙」に「343

シモーヌ・ヴェーユ
Simone Weil



人のマニフェスト」と言う妊娠中絶法を訴える文書が掲載された。不法中絶を選んだ女性343名の署名だ。マニフェスト文は作家シモーヌ・ド・ボーヴォワール(1908-1986)が書いている。「フランスで毎年無数の女性たちが妊娠中絶をしている。罪に問われるのを恐れて危険な条件下で中絶を余儀なくされているが、手術は適切な医療下では最も簡単なものである。何百万の女性たちが黙って口を閉じている。私もその一人だが中絶をしたことを宣言する。私たち女性全員で中絶で
きる自由を訴えよう」

ボーヴォワール、マルグリット・デュラス、カトリーヌ・ドヌーヴと言った著名人が闇の中絶を認め
勇氣ある宣言を行い、女性弁護士ジゼル・アリミ(1927-2020)もそのリストにあった。

ジゼル・アリミはチュニジア生まれでパリ大学法学部でフランスの弁護士資格を得る。1950年代
からアルジェリア独立運動を弁護し、フランス兵に拷問、性的暴力
を受け殺人の罪に問われていたアルジェリア女性ジャミラ・ブパ
シャを擁護し釈放に導いた。

ジゼル・アリミ
Gisèle Halimi



シモーヌ・ド・ボーヴォワールやサルトルと言った当時の知識人
に呼びかけてメディアを利用し性的被害を受けた女性たちの弁護
を続けた。同性愛者の女性二人が四人の男性から性的暴力を受
け、裁判に訴えることを助け、彼女たちに付添い勝利をもたらし
た1972年「ボビニー裁判」はジゼル・アリミの力量だった。こう
した背景があって、1975年バラデュール内閣で厚生大臣を務め、
妊娠中絶法を通したシモーヌ・ヴェーユへの道が繋がっていく。
女性の人権を守るために力を尽くしてきた女性たちが訴えるのは
「権利や自由は人から与えられるのではなく自分で獲得するもの
だ」ということ、人生は闘いの連続であると教えている。彼女た
ちの努力を無駄にせず、意志を受け継ぎ、女性が生きやすい社会
を今後も目指していきたいと思う。（古賀順子記）